〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(35)〉

一～二歳児のガラス絵から、からだを喜ばせて表す子どもの姿に学ぶ

瀧田節子

お茶の水女子大学附属小学校の「アート」の授業は表現と身体性を大切にしたユニークな授業を行っています。

今回、附属小学校でアートの授業を担当されている瀧田節子先生をナーサリーにお迎えし、乳児の表現活動を見ていただきました。同じ敷地内に保育所から大学まですべての附属学校がそろうお茶の水女子大学だからこその連携の取り組みです。

はじめに

小学校の子どもたちと図画工作の時間を通したつきあいを四十年続けている筆者は、今、二歳の孫からたくさんのことを学んでいる者です。

二〇〇八年、お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）のガラス絵の活動を参観する機会に恵まれました。はじめに、その時の様子から少し記述したいと思います。

いずみナーサリーのガラス絵に出会う

その日、ナーサリーでは優しい声が子どもたちをいざなっていました。シャボン玉のお話が始まったのです。静かな熱意のある時間が流れました。小さな子どもたちは、お話が終わるころに「♪シャボンダマとんだ～♪～」のメロディーが聞こえてくるのに気づき、からだを動かします。そして、そおっと音のするほうへ行くのでした。先生が弾く電子オルガンのシャボン玉は、テラスの入り口から聞こえていました。

音色に誘われてテラスに来た子どもたちのからだは、パッとはじけるようでした。シャボン玉が飛んでいたのですから。シャボン玉はガラスに向かいます。ふうわりふうわり。シャボン玉はガラスに当たって消え……、消えると、ポンと、まあるい色の玉が生まれます。スウッ、パン、ポン。シャボン玉は色の玉に生まれ変わっていきました。

小さな魂は、シャボン玉の動きをからだ全体の感覚でつかんだのでしょう、いつの間にか小さな手に絵の具のタンポを持ち、全身を使ってガラスに色を移すのでした。シャボン玉に心を開き、自分のやりたい絵の具遊びをそれぞれに見つけ、喜々として取り組む姿。先生や参観者の手や足にも色を付けて満足している子どもがいる一方では、水の感触に浸る子どももいました。

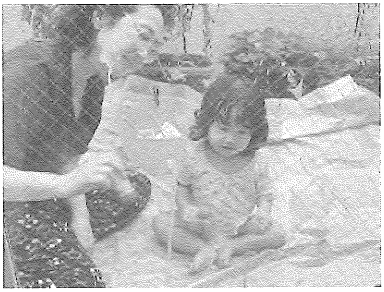
この間、お座りや這い這いの時期の赤ちゃんが保育者と共に室内から、ガラスの向こう側にいる人たちの様子や、ガラスに描かれた絵を目で追ったり指でなぞったりしていました。こうして人は育つのだと感動しました。小さな人たちの視界に入らないように室内からテラスを遠巻きに参観していた筆者は、ガラス絵を通して〇～二歳までの子どもがかかわりあう場面に圧倒されてしまいました。

ナーサリーの先生方が一人ひとりの小さな人たちをどれほど愛して環境をつくり、命をはぐくんでいるかが伝わりました。保育所でなければできない教育の実際に触れました。

ここで、小学校のことを振り返ってみようと思います。今回の学習指導要領改訂のキーワードは「生きる力」「コンピテンシー（成果を出すための能力）」「学力」の三つで、図画工作科では学習活動を通して、子どもの資質や能力を育てるという方向性がより明確にされました。ナーサリーのガラス絵の活動のような、形や色、イメージなどを通した言葉によらないコミュニケーション活動はこの教科ならではの交流活動で、感性・情緒の基盤でありましょう。図画工作科は造形を通した人間教育なのです。

一歳四か月の孫と絵の具遊びの始まり

ナーサリーで一～二歳の小さな人たちの活動を目の当たりにし「一歳でも絵の具遊びができる」ことを知り、早速、孫Kと遊ぶことにしました。まずは、ナーサリーで教えてもらった道具を作りました。絵の具は混ざり合うことを想定して、この日は赤・黄色・ピンク・オレンジの四色を用意。ナーサリーの先生は色を用意するにあたって試行錯誤されたと聞きました。フィルムケースにス



▲写真1：初めての絵の具

▲写真2：スポンジタンポでポン

トッキングに包んだスポンジのタンポ、筆は柔らかい造形筆。

九月の下旬、ベランダのガラス戸で楽しみました。Kは初めのスタンピングは恐る恐る、しかし、瞬時におもしろがってキャーキャーと声を挙げ熱中。しばらくすると筆の存在にも興味を示し、途中から加わった父親とやりとりしながら、ペインティングも始めました。昼食前の一時間近くを飽きることなく取り組みました。

▲写真３：ばあばもポン

一歳児の表現・発見・鑑賞・共有のサイクル

二回目の絵の具遊びは、一回目の数日後、九月でしたが、三回目は十一月でした。一歳六か月のKは、ガラス絵遊びをしているうちに、絵筆を拭き取ると、その色が筆拭き雑巾に付いていくことに興味をもち、雑巾が画布になって、絵の具を染み込ませる遊びを熱心に始めました。雑巾のタオルを折り変え、裏側面に染み出る色も確かめながら、筆でポンポンと押し付けました。やがてKは、タオルに目を落とした

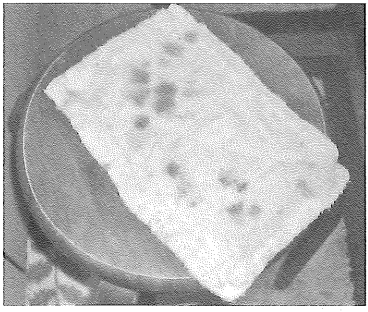
▲写真４：雑巾が画布になって

▲写真５：雑巾に付けた色を見つめる

ルを見せに行きました。筆者はカメラを手にし、すぐそばにいましたが、彼女は立ちはだかるテーブルを越えて、ママの所に行ったのです。表現しながら見つけたうれしい気持ちを、大好きなママと一緒に味わいたかったのでしょう。

この日、Kは母親と絵の具遊びを始めました。黄色の絵筆に赤色が付いたので、母親は雑巾のタオルで筆をぬぐいました。この後、Kは絵筆にほかの色が付いた時に母親をまねて筆をタオルで拭き、このまま立ち上がると、食卓にタオルを広げてこれを見るのでした。

Kはこの後すぐに、台所で晩御飯のしたくをしていた母親の所にタオル



▲写真6：ママに見せた作品

時、白いタオルに付いた色を新たな気持ちで見たのだと思います。新しい表現の方法を見つけたKは満足するまで描き、作品を眺め、うれしさを大好きな人に伝えました。

▲写真7：雑巾で描く（次ページ写真に続く）

創造的表現、あるいは自己表現

Kが絵の具で遊びたいと思う時に、ガラス絵は続けられました。Kはそれまでの体験から、絵の具遊びを通して自分のやりたいことを見つけながら、表すようになっていました。

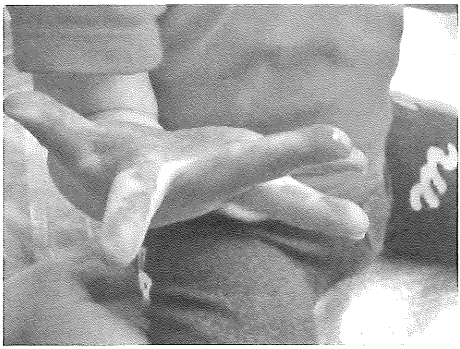
春三月、一歳十一か月のころ、Kはガラス絵を雑巾で消しては、また絵の具を付けることの繰り返しをして遊び始めました。そのさなかには雑巾にタンポで絵の具を付け、色の付いた雑巾をじっと見て何かを考えるような場面もありました。また、絵筆の軸を使い、ガラスに付いている絵の具をカリカリとかき落とす遊びを偶然から見つけたり、手でぐるぐる描き、その絵の具の付いた手のひらでスタンピングしたり、自然に遊びをつくりだしていました。

この一歳半の乳児がからだを喜ばせて表す姿から、創りだす力は人の内にあると、筆者は改めて学んだのでした。

（お茶の水女子大学附属小学校非常勤講師）

▲写真8：ガラスにペッタン

▲写真9：赤い手のひらを見る



▲写真10：絵の具に入れた指の感触を確かめている